

ルイス・オーエンズの『白鯨』評に学ぶ

——先住民ゆえの慧眼と死角と

大 島 由 起 子

序

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の『白鯨』(*Moby-Dick* 1851) は19世紀半ばの作品ながら、現代の人種批評家をも烈しく反応させる。本稿では、先住民のルイス・オーエンズ (Louis Owens) の、従来は等閑視されてきた、先住民である彼ならではの『白鯨』批評について検討する。オーエンズの『白鯨』観は、わずかにクリス・ラロンがマーク・トウェイン (Mark Twain) と関連させて述べたくらいである (83)。¹⁾ しかし『白鯨』は『慧眼』の随所で主人公の成長という主題に深く関るかたちで言及され、質・量ともに、『慧眼』で言及されるもっとも重要な作品となっている。この作品は American Indian Literature and Critical Studies Series の第1巻となった名作である。先住民作家で批評も手がける場合が往々にしてそうであるようだが、オーエンズの場合も小説と批評が連動しているため、本稿では考察の中心にオーエンズの小説『慧眼』における『白鯨』評を置き、オーエンズ批評における『白鯨』評も検討する。

オーエンズはミシシッピのチョクトー族そしてオクラホマのチェロキー族の血を引き、アイルランドなど白人の血も入った混血として、1948年に生を享けた。幼少期はミシシッピのデルタ地方で暮らし、7歳でカリフォルニアに移住した。長じて森林巡査、森林消防などに携わる。彼は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校から学士、修士号を、1981年には同大学デーヴィス校から博士号を取得する。カリフォルニア大学デーヴィス、サンタクルーズ校、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校、ニューメキシコ大学などで教鞭を執った後、カリフォルニア大学デーヴィス校に戻って教授職にあり、広範な活躍をしていた。だが、2002年夏に自殺し、わが国にも衝撃を与えたことは記憶に新しい (中山、橋口、Martin)。他にもそういう先住民は多いが、オーエンズの場合も小説と文学批評は連関しており、小説中に有機的に文学批評が入り込むことも、しばしばである。彼の批評は概ね、混血先住民文学におけるアイデンティティの問題をめぐるもの、いまひとつはジョン・スタインベック (John Steinbeck) 研究である。オーエンズは学部頃から、文学研究に平行させて小説も書く。小説には『狼の歌』*Wolfsong* (1991)、『慧眼』*The Sharpest Sight* (1991)、『骨のゲーム』*Bone Game* (1994)、『ナイトランド』*Nightland* (1996)、『暗い川』*Dark River* (1999) がある。

1. オーエンズの『白鯨』礼賛

オーエンズの小説『慧眼』の主人公は、16分の7先住民の血が入っていて、まだ文化的アイデンティティが確立していない混血の先住民コール・マッカーテンである。外見はむしろ白人に近い。作品は、主にカリフォルニアを舞台とした殺人事件を軸に展開する。小説の始めでは、ベトナム戦争から精神的な外傷をかかえて帰還した、主人公コールの兄アティスが、恋人を殺す。そしてアティスが精神病院から姿を消す。彼の死体らしきものを、主人公コールの友人がサリーナス川の濁流のなかに一瞬、見る。アティスの父ホーイは、アティスが殺されたと考えて、部族が敵討ちを鉄則としているので、犯人を捜し出して復讐しようと躍起になる。終盤まで犯人は不明で、アティスの死体も見つからないままに一連の事件が起きる。これが復讐の連鎖という表層をなす。コールがアティスの骨を発見し、きれいにして故郷に持ち帰り、部族の骨の儀式を成就する。

『慧眼』ではコールが先住民世界に参入していく成長物語も、同時進行する。『白鯨』が関係するのは、こちらの展開においてである。ホーイは、息子コールを徴兵逃れのために叔父のルサーのところでかくまってもらうことに決める。先住民はベトナム戦争ではとりわけ危険なところにやられ、結果として死亡率は高かった。²⁾ このことについてはアティス自身もベトナムで経験したことであった。父ホーイは、みすみす次男コールをも死なせるには忍びないと考える。だが、老ルサーが暮らすミシシッピの奥地といえば、ホーイにとっては故郷であっても、ホーイの息子コールにしてみれば馴染みがない。それでもコールは父の命令に従う。むろん、象徴的には、ミシシッピのかつてのチョクトー族の地への旅というものは、コールにとってみれば子供時代、かつ部族の昔へと遡る旅に他ならない。ホーイにしても、最近でこそ先住民関係の本を読みふけり昔ながらの先住民のようになっているとはいえ、都会に長年暮らすうちに部族の根から遠いところにいると自覚している。コールにとっての代理父的な役割を果たすのが、老ルサーである。部族のほとんどが都会暮らしをしているのに対して、ルサーは白人が見向きもしない湿地ヤズーで、ほぼ白人到来以前のような暮らしを続けている。³⁾

コールが老ルサーの人里離れた住処を見つけると、ルサーは、自分が夢のお告げを使ってコールを呼び寄せたと告げる。呼んだ理由は他でもない、コールに父ホーイが企んでいる復讐の連鎖を絶てというメッセージを託すためだという。⁴⁾ ルサーは今ではシャーマンのようになっていて、幻視を見、人に幻視を見せる力も備えている。彼はカリフォルニアでの殺人事件など皆目知らないはずだが、行方不明のアティスが濁流に流される幻視を得ており、アティスの水死体がサリーナス川にあると告げてコールを驚かせる。後にコールがカリフォルニアに戻って川で兄を捜している間も、ルサーには、コールが雨季の濁流によってほぼ白骨化した死体に近づいていくことがわかる。アティスの骨が呼ぶから、兄を思う気持ちさえ強ければ、コールが近くまで行けばアティスは見つかるという、実際、そのとおりとなる。そして老ルサーとの邂逅によってイニシエーションを経たコールには幻視の力が宿る。ちなみに小説表題の、見るということという主題は「自分が誰であるかを知る」ことでもある。

『白鯨』は主人公コールの成長物語の方と関連する。コールを導くにあたっては、ルサーならび

にオナティマという二人の年配者が重要である。コールのルサーとの再会後間もなく、ルサーの長年にわたる伴侶オナティマの登場となる。（どうやら彼女の格が上らしい。彼女は白人の母によって白人の教育を受けさせられ、大学にも行ったことがあり、外界に詳しい。西洋文学にも造詣が深い。）『慧眼』にはさまざまな人物を介しての、他の文学作品への言及が横溢するが、『白鯨』への言及は質・量共に他を圧する。⁵⁾ このようにオーエンズは、白人と先住民の世界の間で引き裂かれている青年コールに年配者たちの口を借りて『白鯨』から学ばせようとする。ただ、『白鯨』は概ね肯定的に提示されるものの、決して手放しで礼賛されるわけではない。以下、『慧眼』における『白鯨』の役割を詳しく見てゆく。

まず肯定的な『白鯨』の捉え方を検討する。対面後間もなくのこと、ルサーがコールに『白鯨』について長々と語り始める。以前、そもそも『白鯨』は、無秩序なこの世で生きていくための必読書として、オナティマがルサーに読むことを勧めた作品だった（90）。オナティマは『白鯨』が「世界を変えるために創られた」物語と考えているが（110）、彼女とルサーの意見は渾然一体となって提示される。長年連れ添った恋人であってみれば、読者としてもとりたてて両者の意見を区別する必要もないのかもしれない。以下の『慧眼』からの長目の引用部は、『白鯨』観についての重要なくだりなので、吟味しながら読むこととする。（いずれもルサーがコールへ語った言葉である。なお、ルサーの話す英語は文法的正確さに欠ける箇所も多い。）

“The man that told the story [Ishmael] thought kind of in a Indian way. He knew the world had to be balanced, and he knew a man’s job was to keep awake and watch everything and know the witchery that was loose in the world. He was on a ship that had the name of a tribe they [the white] wiped out a long time ago, and the captain of that ship [Captain Ahab] was out to kill the witchery, something the storyteller knew he couldn’t do.” (90)

訳：「その物語の語り手は先住民のような考え方をする男だった。彼は、この世は均衡がとれていなくてはならないこと、人は全てのことをきちんと見ていなくてはならないことを知っていた。この世には妖怪が解き放たれていることも心得ていた。そして昔に絶滅させられた部族名を冠した船に乗っている。船長は妖術を退治しようとしており、語り手は、自分は妖術に挑む勇氣はないと知っていた。」

周知のように、『白鯨』のエイハブ船長は自分の片脚を奪った白い抹香鯨モーヴィ・ディックを世界の海を巡って追撃し、破滅に至る。ルサーは、語り手イシュメールは自分個人では妖術に挑めないと知っているという。これは、後甲板の演説でエイハブが航海の真の目的はモーヴィ・ディックを仕留めることであると明かすと、即刻、魅入られたように危険な白鯨追撃へと向かう乗組員の心境分析として正しい。当時の捕鯨船の水夫一般は、軍艦や商船、客船と比べて最低の社会階層であった。そうした乗組員の心を人心掌握に長けたエイハブがつかむのである。乗組員は鬱積が溜まっ

ていようとも、自分たちを社会の底辺に押し込めている世界の巨大暴力に挑むことなど覚束ない。

ルサーは、エイハブは「巨大な白い食人種」のような白鯨と戦う英雄であるとみなし、白人のエイハブを下のように褒める。そして、自分たちチョクトー族のお話と、結局白い怪物に滅ぼされる『白鯨』の粗筋が似ていると述べる。エイハブは果敢な挑戦者ながらも、白を殺すことができないことを知らなかった。この点のみが、チョクトー族とは違うと言い添える。

“The giant fish [Moby-Dick], like them giant white cannibals that us Choctaws killed out a long time ago, finally takes the captain down to the bottom of the ocean You see, that captain didn't know you can't kill evil, that you just got to see it and know it like the storyteller did.” (90)

訳：「その巨大な魚は、昔チョクトー族が退治した巨大な白い食人種のように、遂に船長を大洋の底に引きずり込んだ。 . . . な、この世の悪をなくせないということは、語り手のように実際に見て分かるしかないというのに、船長には、悪を殺すなんてできないということが分かってなかったのだ。」

ここでは白鯨が「巨大な白い食人種」と表され、人間のように捉えられている。白鯨を、白人による支配の象徴ととらえる認識は、後述するトニ・モリソンの『白鯨』評と共通する。次のように述べる牧野有通の論とも共通するであろう。「われわれの議論の結論は、「白鯨」とは「アメリカ・アイデオロギー」、すなわちアメリカという白人キリスト教徒主導型国家の「正統派」イデオロギーを象徴的に表すものである、ということである」(168)。牧野は、メルヴィルが愛国心ゆえに、白人支配のアメリカにおいて国家の理想と乖離した価値観を批判した作家であったととらえ、包括的にイデオロギー論を展開する。

ルサーは続けて、『白鯨』の第一銛士クイーケエッグは先住民であり、イシュメールも先住民であるという。むろん、現実レベルではクイーケエッグはポリネシア人、イシュメールは白人であるわけで、ここには論理の飛躍があるが、私には、オーエンズが、トマホークパイプをふかすクイーケエッグを北米先住民であるとみなし、しかもこのことを公然の事実であるかのように前提として論を進めていく点が愉快である。『慧眼』はイシュメールが先住民クイーケエッグと親友かつ象徴的な夫婦になることが、兩人種間の、あるいは男女間の均衡をとることであると寿ぐ。『白鯨』への他の言及箇所では、ルサーがコールに向かって、イシュメールは先住民のように語ることが生き残りに関ると知っているし、物語の重要性も知っている、いい添える (97)。ルサーがいかに多大の期待をイシュメールに寄せているかが窺われる。

さて、『慧眼』のコールの徴兵逃れは、結局、彼が湿地帯の奥地で迷った白人を助けたことを契機に発覚し、コールはカリフォルニアに戻される。コールとの別れ際にも、ルサーは『白鯨』を読めと繰り返すし (127)、コールはコールで、後にルサーを思い出すときには『白鯨』を常に意識に上せ、問題に直面すると、あれだけ『白鯨』を読めと勧められたのにまだ読んでないことに忸怩た

る思いをする（156）。このように『白鯨』には主人公の成長と絡む役割が与えられている。

オーエンズの『汽車の音が聞こえる』⁶⁾には「ヤズーの夕闇」(“Yazoo Dusk”)と題された短編も収録されており、独立した小説としても読める。「ヤズーの夕闇」ではポリフォニー形式で、『慧眼』の主要人物たちが独白をする。オナティマ・ブルーウッドも語り手として登場する。ハーフのオナティマは、二つの文化の間で苦しんだ。しかもそこは奇妙な振れがあった。彼女の父は、純血の先住民であるにもかかわらず白人の価値観をもっていた一方、北部から白人の価値観を教え込むためにヤズーに来たはずのアイランド系の母は、先住民の価値観をもつ。富裕家庭で育ったにもかかわらず、オナティマは13歳のときに初めて『白鯨』を読んだときの印象をこう語る。「私には語り手イシュメールの物語のはかない影のことが全て理解できた。イシュメールは私やルサー・コールみたいなので、私にはイシュメールが放浪者で先住民の友だって分かった」(169)と。白人のイシュメールが社会から追放された流離い人であること、のみならず「先住民の友」だと直観したというのである。オナティマは、環境に適応できないで社会に捨てられたジプシーであり、つまり「イシュメール」であると自己認識している（170）。それほどイシュメールには先住民に訴える力がある。

2. オーエンズの『白鯨』批判

以上、『白鯨』から学ぶべきことについてルサーの意見を概観したが、彼は『白鯨』を手放しで称揚するのではない。それどころか、先述の初めて『白鯨』についてコールに語る場面で、にわかには口調を変えると、以下のように、『白鯨』をあくまでも「白人の本」にすぎないと言い放つ。そしてイシュメール唯一人の生還は兄弟殺しであり、イシュメールは生還によって完全さを失ったと批判し始める。

“But you know, it was a white man’s book. There was a Indian man in it who smoked his pipe with the storyteller. A hatchet pipe like ours. At the end, the white-man storyteller come bouncing up to the surface of the ocean on that Indian’s coffin. You know, grandson, us Choctaws signed nine treaties with the government, smoking the pipe nine time, and evertime it’s just like this book. The white man comes riding to the surface on a Indian’s coffin.” (90-91)

訳：「でもな、「白鯨」は白人の本だ。本には、先住民がいて語り手と煙草を吸ったんだが。われわれのような手斧パイプでだ。話の最後で、その白人の語り手は先住民の棺で海面に飛び出る。若者よいいか、われらチョクトー族は政府と九の条約を結んだ、つまりパイプを九度吸ったわけだが、毎回、ちょうどこの本に書かれているような具合だった。白人は先住民の棺に乗って海面に出るってわけだ。」

この文章でルサーは、イシュメールは先住民クィークエッグを友として、幾度も和平パイプを回

し喫んだ仲でありながら、結局は合衆国政府と同様、自分たち先住民を裏切るのだという。周知のように、先住民諸部族は、白人との和平条約締結の場などでトマホークパイプを儀式として回し喫んだ。上記引用最後の文は、第135章「追撃最終日」でのピークォッド号沈没でイシュメールも、一度は白鯨がつくった大渦に船もろとも吞まれそうになったが、「エピローグ」に描かれているように、生き残ったことを指す。しかも、第110章「棺の中のクイクイエッグ」で、クイクイエッグが航海中に死にかけた際に大工に作らせた棺が、回復した本人の要請で、後には船の救命ブイとして使われるようになっていた。

続けてルサーはコールに下のように、人は自分の民の物語を語るべきであるのに、『白鯨』の語り手イシュメールは兄弟クイクイエッグを殺してしまったものだから、語るべき物語を忘れてしまったのだという。異人種間の友情という物語を「先住民」イシュメールは一貫して語り続けるべきであるのに、彼は物語を変えてしまった変節者だと誇るのである。文化アイデンティティにおいて、イシュメールが象徴的な先住民から白人に戻ったとオーエンズが考えたからであろうが、このことの是非については後述したい。

“This storyteller understood the way the world really was, with everything in balance, good spirits and bad ones and all, but then he changed the story. You see, we got to be aware of the stories they’re making about us, and the way they change the stories we already know.” (91)

訳：「この語り手には、良いスピリットも悪いスピリットも全て均衡しているといったようなこと、この世がどういうところか、よく分かっていた。分かっているながら物語を変えてしまった。よいか、われわれは彼らがわれらについて語っている物語を知っておくべきだし、彼らが、われわれがすでに知っている話を変えるやり口も知っておかなくてはならない。」

引用後半部のように、ルサーは、一度は同族であるかのようにみなすことができたイシュメールですら、所詮は白人であって、イシュメールは、臆面もなく先住民を見殺しにして、白人として、白人好みの、白人に有利な物語しか語らなくなるのだという。しかもこのことは、一人イシュメールに限ったことではなく白人全体のことなのだという。長編『白鯨』に対する高い評価を、わずか一ページの「エピローグ」ゆえに転覆させるほどに、オーエンズは強迫観念のように「エピローグ」に取り付かれている。いかに先住民が白人に都合よく表象されているかを分析するときに、オーエンズは通常、批評家としての慧眼ぶりを遺憾なく発揮するわけだが、ここではどうであろうか。

このように『慧眼』には、先住民と友になったイシュメールにたいする大いなる期待と、それが裏切られたと感じるがゆえの失望と批判が刻まれている。白人の語りのからくりを読む慧眼を持ってと説くオーエンズの眼差しには、歴史に裏打ちされた教訓が籠められていて一理ある。しかしながら、ルサーのイシュメールへの幻滅は、やや短絡的であろう。

オーエンズは『汽車の音が聞こえる』所収の『白鯨』論でも、白人が、先住民から学ぶべき英知は吸い取り、自分だけ生き残るとするのは白人の手になる物語の典型的な展開であり、類型は、マーク・トウェイン(Mark Twain)⁷⁾ やフェニモア・クーパー (Fenimore Cooper) の皮脚伴物語にも見られると指摘する。『白鯨』についてはこう述べる。

For Ishmael it is the tomahawk pipe and bed he shares with Queequeg as *Moby-Dick* opens, and not only the Indian's coffin he floats on amidst that vast, empty sea at the novel's close but also the novel's final scene, in which the Indian Tashtego nails the hawk of heaven to the acutely named *Pequod's* sinking masthead. (162-163)

訳：イシュメールはクイークイエッグと多くを分かち合う。『白鯨』の始まりでは、彼とトマホークパイプやベッド分かち合うし、イシュメールが大海原でぼつねんと浮きながら掴まる先住民の棺のみならず、小説の終結部では、先住民タシュテゴが天の鷹を、沈みゆく、ふさわしくもピークォットと名づけられた船の帆先に打ちつける場面をも分かち合う。

錯綜したこの文を整理すると、オーエンズはここでイシュメールがクイークイエッグと三つのものを分かち合うと述べている。第一は、ベッドやパイプを。このことは二人が親密になる潮吹き亭での場面から明らかである。第二には、棺を分かち合うと。『白鯨』の「エピローグ」では、異人種の絆を象徴するクイークイエッグの棺桶・救命ブイが遠心力で空高く上げられて、イシュメールに届くので、こちらの分かち合いも理解しやすい。捕鯨船沈没後にクイークイエッグ本人はいなくとも、イシュメールはクイークイエッグの入れ墨の模様で、ゆえにクイークイエッグの身体を象徴する棺につかまって漂う。その結果として別の船に拾ってもらうからである。しかし三番目に挙げられた、イシュメールが「タシュテゴが天の鷹を、ふさわしくもピークォットと名づけられた沈みつつある船の帆先に釘で打ちつける場面すら」分かち合うというのは、オーエンズによって説明が加えられておらず、舌足らずといわざるをえない。当該の何を、クイークイエッグとイシュメールが分かち合うというのだろうか。同じ銛士ではあっても、現実の先住民タシュテゴと比喩的な先住民クイークイエッグを重ねることは可能でも、そこにイシュメールまでも重ねる必然性がこの一節からでは測りかねる。が、この指摘には先住民オーエンズならではの慧眼があるので、『白鯨』の同場面について述べている『慧眼』の箇所を参考にしつつ、吟味したい。下記に引用した『慧眼』での同場面への言及場面では、タシュテゴは、捕鯨船とともに水没しかけ、先住民である彼の「赤い腕」の先だけを水上に突き出している。短艇のエイハブが船長の旗を帆先に付けろと命じたために、旗を付けようとしている。死に喘ぎつつの営為であった。下記の「沈んだ蛮人」というのは、第三銛士で生粋の先住民タシュテゴのことである。

“Thus the ‘submerged savage’ takes the doomed bird of heaven down into the

center of the great naturalistic vortex, an index to the heart of ultimate darkness in the colonial experience. And as Melville so splendidly recognized, without the Indian [Tashtego] as a static referent, the threat to the white psyche would remain unacceptably disembodied and amorphous, internalized and unsignified.” (84-85)

訳：「だから「水中に沈んだ蛮人」が天の、消える運命にある鳥をとり、海の大渦に引きずり込んだ。渦の中心は植民地経験の究極の闇、正にその核である。そしてメルヴィルが洞察したように、静止した指示対象としての、その先住民がそこにいなければ、白人心理にとっての脅威は、信じられないほど現実から遊離してしまい、明確な形もなく、抽象的にすぎて意味をなさないままだったろう。」

オーエンズは白鯨を白人による支配の象徴と見るので、捕鯨船を沈めようとして白鯨が旋回してつくった渦は、白による狡猾な暴力の象徴、すなわち「植民地的経験の究極の闇、正にその核」ということになる。白人と先住民の関係を文字通りに植民地体験と読むことの当否はここでは問わないが、比喩としては、支配・被支配関係がこの場面に表れたと読むことは、むしろ可能である。捕鯨船の名前となっている白人に絶滅させられた部族ピークオットの名、生粋の先住民タシュテゴということを考え併せれば、ここで先住民タシュテゴの死をもたらすのが、白による植民地支配の暴力としての白鯨と読むことも妥当である。私は、当該場面における読者にとっての、先住民タシュテゴの存在がもたらす「脅威」に言及した者を、オーエンズの他に知らない。よって、オーエンズが、タシュテゴの腕には、読者にとっての脅威が隠されていると指摘している点は、瞠目に値すると考える。タシュテゴは、天から飛来したように描写される鳥を帆先に打ちつけ、そうすると死にとらわれて、ハンマーをその位置で凝結させる。つまり上記の「静止した指示対象としての、その先住民」となる。その一瞬のタブローに、オーエンズはアメリカ史の縮図を見てとる。沈没場面については別箇所でも論じたのでここでは繰り返すは避けたいが、私は、天からの帝國的な嘴をもつこの鳥を「赤い腕」が「赤い旗」で包んで捕えたという以上は、この場面は合衆国の掲げたマニフェスト・デスティニー（明白なる天命）にたいする先住民の復讐であると解釈する（Oshima）。

3. オーエンズ再検証——トニ・モリソンを介して

ただし、オーエンズは、イシュメール唯一人の生還には、メルヴィルの限界をみる。私には、オーエンズは、タシュテゴが読者に与える脅威について指摘しながら、その主題を発展させなかった点が残念である。オーエンズは、メルヴィルが先住民の与える脅威について踏み込んで書けたのにそうはしなかった、というようには考えなかった。つまりメルヴィルが真意を書き込むことを自制したのだというようには読まなかった。しかし、メルヴィルは白人ではあっても、何も全ての抑圧から自由であったわけではなく、彼が編集者を、市場を意識して作家活動を続けたことに変わりはない（Post-Lauria）。よって、オーエンズのメルヴィル批判には相手の立場に立って考えてみる想像力の限界を感じざるをえない。

先述のオーエンズのイシュメール批判に戻ってみたい。「エピローグ」に至って、イシュメールが象徴的な先住民から白人に戻ったという前提であったが、はたしてそうであろうか。イシュメールの生還場面にしても、厳密には、海からブイが飛び出てイシュメールに近づいたわけで、先の引用部でオーエンズが述べたようにイシュメールが棺・ブイにつかまって海面に飛び出たわけでない。ここにもオーエンズの意図的誤読がある。無論、どちらかが生き残れる状況下で、イシュメールがクィークエッグを見殺しにしたわけではない。そもそも捕鯨船沈没時といえば、イシュメールはエイハブの短艇から海に投げ出されていたのだし、方やクィークエッグは捕鯨船の帆先にて、両者の間にはかなりの距離があった。しかしこうしたことは重々承知のはずながら、オーエンズはイシュメールが先住民を裏切ったかのように読み替える。先の引用部から推し量るに、その意図的誤読の苛烈さには、条約不履行により幾度も裏切られてきたチョクトーの部族史に端を発する、白人全般にたいする疑心暗鬼が潜む。

「俺のことはイシュメールと呼んでくれ」(3)というのが、人口に膾炙した『白鯨』冒頭の一文である。アブラハムがサラに生ませた非嫡子イシマエルは、ユダヤ・キリスト教圏では呪われた者である以上、「俺のことはイシュメールと呼んでくれ」と要請することにより、語り手は自分の周縁の立場を明らかにする。ここではイシュメールとクィークエッグとの異人種間「結婚」を論じ直さないが（大島）、イシュメールは死別後もクィークエッグに忠実であったと私は考える。敷衍すれば、あまり注目されていないが、第102章「アーササイディーズの島の木陰」にあるように、語りの時点では何とイシュメールは全身刺青なのである（451）。第3章「潮吹き亭」でのクィークエッグとの邂逅場面で、あれほど「蛮人」の全身刺青に恐怖と嫌悪を感じて大騒ぎをしたイシュメールとは、雲泥の差というほかない。さらに、『白鯨』第54章の「タウン・ホー号の物語」では、イシュメールは自分がこれからモーヴィ・ディックについて「リマ風に」語るといいながらスペイン人たちを相手に、ある船で起こった暴動の話をする。そのスペインによるリマ支配にたいする輻輳した語りに籠められた皮肉は、ウィン・ケリーが精緻に分析したとおりでであろう（Kelley）。物語で描かれた体験後、数年してイシュメールは語っているわけだが、彼は植民地主義の批判者となっている。よって、イシュメールは文化的アイデンティティにおいて、オーエンズが糾弾するように白人に戻っているどころか、言動においても自分を周縁人物にしている。

オーエンズの別の批評からも、彼が『白鯨』終結部に拘泥し続けたことが確認できる。オーエンズは『汽車の音が聞こえる』に評論「あたかもインディアンが本当にインディアンであるかのよう」に（“As If an Indian Were Really an Indian”）を再録し、下のように『白鯨』批判を繰り返す。オーエンズには、『白鯨』のピークオッド号という船、「先住民」クィークエッグと「先住民」イシュメールのみならず、終結部で重要な役割を果たす先住民タシュテゴの姿が見え、彼らの声が聞こえるのであろう。下ではタシュテゴのことを「存在していて声をもっているはずの先住民」と表している。そしてオーエンズはその勢いでモリソン（Toni Morrison）批判に転じてゆく。

We find, for example, a surprising erasure of Native presence and voice in Toni

Morrison's *Playing in the Dark*, in which this Nobel Prize-winning African American writer adopts the rhetoric of imperial discovery and cites Hemingway's "Tontos" as well as Melville's *Pequod* without ever noting an indigenous Native presence shadowing her figuration of blackness in America. (209-210)

訳：トニ・モリソンの『白さと想像力』も、存在していて声をもっているはずの先住民を、驚くべきことに抹消している。本書でアフリカ系のノーベル賞受賞作家モリソンは、メルヴィルのピークオッド号のみならずヘミングウェイの「トント」のことを帝國的発見の修辞を用いて論じる。しかも、彼女がいう「アメリカにおけるブラックネス」なるものに影を落とす先住民の存在には、一度として言及することすらない。

このようにオーエンズは、先住民を正面きって論じないモリソンの批評書『白さと想像力』(*Playing in the Dark*) は、『白鯨』同様に、先住民を不在におとしめているという。たしかにモリソンは本批評書で先住民についてほとんど説明していないが、そのことでのみモリソンが先住民を貶めると責めるべきであろうか。彼女にもわずかに先住民の血が流れているとはいえ、モリソンはあくまでもアフリカ系の視座で作家・批評家活動をしているのである。

かつてモリソンは批評「語りえぬ、語られえぬこと」("Unspeakable Things Unspoken")で『白鯨』を激賞した。「巨大な白い食人種」のような、白鯨というかたちをとって現れた白い妖術と戦う英雄であると、正面きってエイハブを英雄視した。吉田迪子も述べるように、「モリソンは、メルヴィルがエイハブにかくまでも執拗に立ち向かわせた白鯨とは、「イデオロギーとしての白さ」のメタファーであったことを立証する。・・・モリソンの解釈は新しいエイハブ像を見せる。それは、「彼が知っていた世界を貪り喰っている怪物を殺そうとする英雄的勇気をもった唯一人のアメリカ白人男性」の姿である」(211)。インタビューで、モリソンは『白鯨』を19世紀にあっては複雑さを描きこんだ稀有な作品と評した。「本当に血の通った人物というほどではありませんが、それでも19世紀のアメリカ文学で真に複雑な人間としての黒人を描いた作家といえば、メルヴィルということになるでしょう」(264)と。これは褒め言葉ではあっても、批評「語りえぬ、語られえぬこと」においてほど手放しの賞賛ではなく、あくまでもメルヴィルの人種表象が時代の制約のなかでは素晴らしいと述べているのである。一見するとモリソンは留保つきの作品賞賛に転じたようにとらえかねないが、『白鯨』への評価を下げたかどうかは不透明である。ただし、モリソンはメルヴィルが象徴レベルでしか表現しなかったことを批判してはいない。

オーエンズがかくも反発したイシュメール唯一人の生還にしても、こう考えることはできないだろうか。メルヴィルの思いの底には、棺・ブイだけのはかなさでは飽き足らず、姿としてのクイックイエッグの実感を与えたいという思いが疼いていたに違いないが、彼は思うところあって自制したのだと。つまり、「エピソード」を書いたメルヴィルは、モリソンがいうところの「語りえぬ、語られえぬこと」がこの世にはあるということを知っていたのだと。それは『白鯨』について千石英世がいうところの「暗示でしか語ることでできぬもの」と置き換えてもよいように思われる。

千石は『白鯨』には暗示でしか語ることでできぬ何かがあると書く。「黙ってはられないのだけれども口にはならぬこと、口にすれば身を滅ぼすかもしれぬこと、身を滅ぼしてでもいわねばならぬことをいうとき、真実を語る時、人は暗示という手段を使うほかはない。そしてその暗示を受け取り、受容する人は、暗示の共有者となる。意味が共有される。そのとき共有は、かぎりなく共犯に近づき、そして政治性を帯びるにいたる」(638)。続けて千石は、メルヴィルにとっての暗示でしか語りえぬものの政治性を北米における大虐殺であると特定し、「検閲ということがある。自己検閲ということすらある。だから告発は暗号化され、暗示となる。暗示のないところに政治性は生まれぬ」(638)と述べる。明言は避けて、それこそ暗示に留めてはいるものの、千石は『白鯨』の核にピーコット族虐殺を見ている。

人種批評の隆盛をみた現在から見れば、19世紀の作家のほとんどに不満は生じるのは、致し方がない。しかし、自らが置かれた抑圧された状況を訴えたい者は、相手が白人であろうと男性であろうと、いかなる制約のなかで物を書いたかを想像してみる必要はあろう。むしろ、作家が象徴あるいは暗示でしか語られなかった、語れなかった状況からこそ、高度の策略も生まれうるのではないだろうか。暗示で語ることは、ストレートに語りさえすれば読者に理解、共感してもらえたはずのメッセージが相手に届かない危険を冒すことに等しい。それどころか、読者に失望される可能性もある。だがむろん、それでも作者は内発的欲求に突き動かされて語る。別の武器を使って時代批判をする。そのあたりの事情は、再びモリソンの批評書『白さと想像力』を参考にするとわかりやすくなると思われる。

『白さと想像力』には、ゴシックとロマンスを巡る議論がある。これはメルヴィルの先住民の主題との関連で注目に値する側面である。モリソンは、ヨーロッパが腐敗しているという前提で新世界を築いた初期のアメリカ人は、その実、有色人種にたいする罪悪感、そこから派生する恐怖にとりつかれており、それがアメリカではゴシック・ロマンスというかたちをとって噴出すると分析する(35-36)。「ハーマン・メルヴィルが「暗黒の力」と呼んだものと無関係のロマンスは存在しない。とくに、移民たちがあれこれ想像力を働かせてみることのできる黒い住民 (a resident population) がすでにいる国では。歴史的、倫理的、形而上学的、社会的な恐怖と、問題点と、分裂とは、彼らを通してはっきり口に出して述べることのできるのだ」(37)。ここでモリソンは、合衆国では「ブラック」なるもの、つまり白人が抑圧した闇の具現がいて、白人は、それが回帰する潜在的恐怖を白人が抱いているのだと明言している。ここでの「黒い住民」は、むろん、直接的には黒人奴隷を指す。だが、彼女の「ブラック」なる概念を、そして「移民たちがあれこれ想像力を働かせてみることのできる黒い住民がすでにいる国」という合衆国の表象において、広義には先住民を含めることも許されるであろう。

広義に解釈したいというのも、モリソンが提唱するアフリカ主義 (Africanism) というものは、先住民も含む広がりをもつからである。たとえば、あるインタビューでモリソンはこういう。「『白鯨』の白人登場人物各々にブラックブラザーがいます。彼らは対になっています。フェダラーはエイハブの影、クイーアイエッグはイシュメールの影です。皆が対になっていて、二人でずっと協同

していくのです。現実レベルでの表象ではなく、下敷きとして書かれていることが重要です」(264)。ここに明らかなように、モリソンは「ブラック」なるものに『白鯨』のフェダラーやクイクイエッグも含む。この手つきは、オーエンズが先住民という範疇にクイクイエッグやイシュメールも入れたことと類似しているのではないだろうか。モリソンの批評は、アフリカ系という特定の視座にもかかわらず、他の有色人種にも大きく開かれている。あとは我々が、彼女の指摘を敷衍していけばよいのであろう。『白さと想像力』でモリソンが、黒人存在がアメリカ文化や文学に残してきた痕跡を暴いたことについて、加藤恒彦はこう洞察した。「本書の最大の意義は周辺性からの反撃にある。単に周辺に位置すると思われた黒人存在が実は白人の意識の内部に位置し、そこで抑圧され、歪められ、周辺へと押しやられた過程を暴いている点にある。・・・黒人と白人の関係は同じ国の内部における支配・被支配関係にあったという点である。その結果、黒人存在は白人の意識のより内部にはいりこみ深い影響を与えたのである」(234)。加藤のこの一節における黒人は先住民に置き換え可能だと私は考える。白人の意識のより内部に入り込んだ後、アメリカ文学でどういう具体的な形で先住民が亡霊のように現れたかについては、メルヴィルへの言及こそ少ないが、レネ・バーグランドの先住民研究が全体像を伝えてくれる(Bergland)。

見たように、インタビューでモリソンは、時代制約を鑑みれば、メルヴィルはよく健闘したと述べるに留める。だが、私は、この戦いぶりにこそ、メルヴィルの苦渋と、作家的工夫の編み出した独特の語り口があったことを、モリソンが理解したととらえる。本稿では扱う余裕がないが、メルヴィルの意匠は、モリソンの語り口にも似た、表層の奥に人種の歴史を籠めたものであり、晦渋とユーモアに満ちている。時代の制約内で可能な範囲内でメルヴィルが書いた点を、モリソンは評価し、オーエンズは逆にそこに裏切りを見た。両者のこの違いは、自身が小説で語りえぬものを何とか語ったモリソンと、語りたいことを隠蔽することなくメッセージを発し続けたオーエンズの創作の場の違いにも、一因があると思われる。モリソンは『白さと想像力』において、他の作家が秘密の戦いを戦っていることがわかった瞬間に、自分は喜び(delight)を感じるという(4)。そういう類の作家である。私はオーエンズのメルヴィル批判には想像力の限界を感じざるをえない。オーエンズは自分の先住民性に懊悩するあまりに相手の立場を慮る余裕を失っているように思われてならない。それは創作現場における彼が、暗示でしか語れないことをいかに語るかについて懊悩する必要がなかったことと、決して無縁ではない。

4. オーエンズの想像力が及ぶ『怒りのぶどう』

とはいえ、想像力が及ぶ範囲内の作品にたいしてはオーエンズが先住民ならではの批評をしている。彼はスタインバック研究でも著名で、二冊の批評書を出している。一冊目の『ジョン・スタインバックのアメリカの見直し』(John Steinbeck's Re-Vision of America)には『白鯨』への言及があり、ここではイシュメールを評価している。アメリカが信じるエデン神話の下に醜い現実があることを見はするが、希望も捨てずに忍耐強くもあるという理由から、イシュメールを『怒りのぶどう』の主人公のひとりトム・ジョードに重ね、両者ともに均衡がとれた人生哲学を信奉しているが

ゆえに指導者の風格であるとまで褒める（134）。特に二冊目『ジョン・スタインベック「怒りのぶどう」を読む——アメリカのエデンの果て』（*The Grapes of Wrath: Trouble in the Promised Land*）で披露したオーエンズ批評の独創性には、先住民批評家としての面目躍如たるものがある。オーエンズは、従来は『怒りのぶどう』に出没する先住民にはほとんど注目されてこなかったところを、作中の先住民をあぶりだして表象分析した。むろん、メルヴィルの『白鯨』とスタインベックの『怒りのぶどう』では時代も舞台とした空間も大きく違うが、先住民のオーエンズが、白人の手になる小説に隠された先住民的要素を分析する点は共通している。オーエンズはアメリカの神話という限りはどの作品においても先住民表象を論じる必要があると考え、この述べている。「『怒りのぶどう』におけるアメリカン・インディアンへの存在は重要であるが、ほとんど注目されていない。この作品を貫く二つの概念、ジム・ケイシーをつうじて表現されるアメリカの神話と自然との直感的合一感が表明されているからには、インディアンがこのアメリカの叙事詩の影に出没するのは必然である」（58）。読者の覚醒を促す貴重な提言といえよう。

『怒りのぶどう』には、漠然とではあるが、先住民に対する畏怖の念も描き込まれている。第23章のエピソードでは、ある峰の頂上に、夕日を背に一人の先住民戦士が裸で立っていた。彼は両腕を広げ、十字架のように見えた。この先住民があまりに無防備なので、兵隊はひるむが、挿話の語り手が撃ち殺した。ところが不遜なはずのその語り手が、転がり落ちる先住民の死体を見たときに取り返しがつかないことをした気がしたという。『怒りのぶどう』のこの一節についてオーエンズは、先住民こそがアメリカの可能性の象徴だという。「移住農民たちは、そしてスタインベックの読者も、なにか「偉大なもの」——神と同じほど偉大なもの、あるいは自然——との結合の喪失を感じるだろう」（61）と。⁹⁾ オーエンズはこのように、スタインベックは北米先住民を何かしら偉大なものとして表象するものの、描かれた先住民は実体を伴っていないという。というのも結局、白人が「嘆き悲しむのは、彼ら自身の喪失あるいは減少なのであり、殺されたり土地から追放された実在の人々ではない」（58）と。

一方、『怒りのぶどう』の主人公たち白人小作農に限らず、先住民もまた、オクラホマを追われ西への移住を余儀なくされた。オーエンズは、スタインベックがこの史実を前景化させているという。この小説には、白人作家にあっては例外的に二人の精彩ある先住民（チェロキー族）が描かれている。そのうち一人は第23章に現われ、キャンプ地でのダンスパーティーの夜、異教徒的な狂乱ぶりで音楽に身をゆだねて踊り狂う。「スクエア・ダンスが強烈な性的な響きをもって原始的儀式的レベルに近づきはじめるとき、選ばれた女性はインディアン——アメリカ文学をつうじてインディアンは白人のガイドとして無意識の原始の森に入っていく——であり、超感覚能力——「鷹の眼」のような人——が必要とされるとき、選ばれるのはまたインディアンである」（63）。いま一人は第24章に登場する、同キャンプ地の委員に、鋭い感覚ゆえに見張り役に選ばれる混血先住民ジュールである。ハーフのジュールが、生粋の先住民に見えると白人が言うと、ジュールは嬉しがりもせずこう答える。「ちょうど半々さ。まるまるだったらいいと思うよ。指定居住地に土地をもらえるからな。生粋のやつらの中には、とてもうまくやってるのがいるんだ」（62）。オーエンズがジュー

ルを生き生きと描かれた先住民であると評するのは、ジュールが白人に、臆せず本心を述べているからであろう。ジュールは控え目に佇むのでもなく媚びるのでもなく、自分は白人の血のせいだ損をしていると、相手の精神を逆なでするようなことをわざと口にするのである。オーエンズはスタインベックが「諸作品をつうじて神秘的な「インディアンらしさ」について強迫観念的な興味を示したにもかかわらず、スタインベックの小説のうちいかなる作品にも、真のネイティブ・アメリカン、その複雑性のすべてをもち、今日の世界に生きる切れば血のであるような生身のインディアンは、この場面におけるほどいきいきと描かれていない。ここに、スタインベックの作品中ほんの瞬時であるが、今日のアメリカン・インディアンがアメリカ的生活の真の苦境をともにするように描かれている。ほんの短い間、インディアンは影の世界から、この世の現実の光の中に出る」(62-63)。このあたりの描写ではオーエンズの筆は踊っている。

しかしオーエンズは、このようにスタインベックが精彩ある先住民を描いた点は評価しつつも、スタインベックが、当時の先住民に大きく作用したドーズ法のことをろくに知りもせずに、上のジュールの台詞を書いたであろうと推測する。「ジュールが自分の権利やチェロキー族の土地の現状についてあまりに無知であるし、スタインベックも、その可能性はあるものの、あまりよく知らない。スタインベック1887年のドーズ法、インディアン支族の所有地を分け、結果的9千万エーカーの土地をインディアンの手から白人の支配に移した法律のことを知らなかったようである。この法律の条文によれば、ジュールのような混血人は生粋の人と同じ土地を獲得する権利がある。もしもスタインベックがいつものように十分な調査をしていたならば、彼はまたチェロキー指定居住地がなくなってから長い年月が経過していることを知ったであろう」(63)。ただし興味深いことに、オーエンズは、スタインベックの無知を糾弾するというのではなく、「いくぶん残念な」恥ずかしいことという程度、揶揄という程度に留めている。「細部の描写においてとくに真実性や正確さに腐心してきた作家スタインベックが、ここでその対象について十分に知ろうとしなかったのはいくぶん残念なことである」(63)と。この、ジュールという人物をめぐるスタインベック自身の事実誤謬ということになってくると、何やら、チョクトー族とチカソー族を混同したウィリアム・フォークナー(William Faulkner)を想起させずにはおかない。チョクトー族であるオーエンズ家の、カリフォルニアへの移住を考えるにつけ、実人生における土地や血という接点ゆえに、オーエンズがミシシッピの片田舎の架空のヨクナパトーフアを舞台とすることが多かったフォークナー作品や、オクラホマからカリフォルニアへの移住を扱った『怒りのぶどう』を代表作とするスタインベックに鋭敏に反応することは、当然といえよう。¹⁰⁾

オーエンズ家のカリフォルニア移住は、ダスト・ボウルという、オクラホマを襲った旱魃、砂嵐に辛酸を舐めさせられて故郷から退去させられたことによる。この状況は、19世紀半ばにインディアン強制移住法によってミシシッピ河以西に追われた先住民諸部族に似るはずである。かつてはミシシッピからルイジアナにかけて暮っていたチョクトー族も強制移住の対象であり、カリフォルニアをはじめとする都会に拡散して現在に至る。『慧眼』のルサーのように故郷にしがみついた先住民は稀であった。これは、ごく一部のチェロキー族がアパラチアの山奥に分け入ったことと似

ており、苛酷な自然環境で生き延びる術を身に着けていなければ到底おぼつかない選択であった。

『慧眼』には、いかに先住民が、ホピ族やナヴァホ族をわずかな例外として、白人到来以前の土地と無縁のところ暮らざるをえなくなっているかについて、「誰かが大きな棒で、全てを掻き混ぜたみたいだ」（19）という台詞もある。『慧眼』ではコールの父も、ミシシッピのチョクトー族で、これまたダスト・ボウルゆえに結婚後にオクラホマからカリフォルニアに移住し、チェロキー族のコールの母も、同じ理由から13歳のときにオクラホマからカリフォルニアに移住した。考えてみれば、白人到来までは東海岸のジョージア周辺にいたチェロキーは19世紀にオクラホマまで「涙の旅路」を辿らされ、果てに、20世紀前半には西海岸カリフォルニアにまで至った者も多いということである。

スタインベックの多くの小説に出てくるサリーナス川で少年時代に遊んだオーエンズにとって、スタインベックは思い入れの対象だった。オーエンズは、「スタインベックの諸作品、とりわけ『怒りのぶどう』にたいする私の最初の反応は、主観的、感情的なものでした」（vii-viii）とか、「私がよく知っている世界をひとりの作家がじつに完璧にとらえ得たことに驚嘆」（vii）したというように、始めからスタインベックに敬意を抱いている。『怒りのぶどう』の主人公たちジョード家と、オーエンズ一家をはじめとするチョクトー族との重なりを挙げることもできよう。¹⁰⁾

スタインベックについての批評書のような、まとまった形こそとっていないものの、オーエンズは『白鯨』に愛憎を抱き続けていたといえる。オーエンズにとっては『怒りのぶどう』のみならず『白鯨』もまた、長年にわたって重要であった。しかし、スタインベックに感じたような親近感を抱く対象となりえなかったメルヴィルに対しては、オーエンズは憤りの念を遂に払拭できないままであったようだ。このことを本稿ではオーエンズの『慧眼』ならびに批評をとおして見てきた。

結 語

オーエンズの『白鯨』賛美にはトニ・モリソンと重なるところが多く、いかに白鯨という、壁のように押し寄せ、自分を囚人とする巨大で得体の知れない白い暴力というものが、白人以外の作家・批評家から、似た反応を引き出すかの一つの証左となる。オーエンズが、人生上の接点はないはずのメルヴィルに拘泥してやまないのは、『白鯨』に多大な期待を抱いて読み進めたために、「エピローグ」に至って裏切られたと感じ、生涯、その気分に支配されたということなのではないだろうか。早くに唱えるべき哲学をみつけてしまった作家・批評家の限界であったかもしれない。また、裏返して見るなら、そこには、先住民が減り行く人種として表象され続けてきた現状を打破したいという祈りもある。オーエンズのメルヴィルとの距離感は、オーエンズ自身と重なる部分が多々あるスタインベックや、重なりそうで重ならないフォークナーへの反応とも、おのずから違ったものであったと推測される。

オーエンズがメルヴィルのどこに共感を寄せ、どこに反発したのか、オーエンズの先住民ならではの慧眼ぶりを示した『白鯨』評からわれわれが学べることは多い。ただし、以上述べてきたように、彼の指摘を鵜呑みにするのではなく、先住民としてのこだわりゆえに、かえって死角となった

ことについても、想像力を及ぼす必要があることを忘れてはならない。

*本論文は平成16本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) (2) 「メルヴィルの小説にみる先住民表象の虚構と事実」(課題番号15520209) の研究成果の一部である。

注

1. 一見、網羅的なリーガル＝ケラードの『慧眼』における他の文学作品研究にも、『慧眼』で最も重要な他作品であるはずの『白鯨』への言及はなく、メルヴィルの名前すらない点は、手落ちであろう。このハイブリディティ分析は、ギリシア神話(ダイアナ神話等)やシェイクスピア、探偵物語、ベトナム戦争文学、チョクトー族の文化に根ざす物語(仇討ち、邪悪なギャングラー、双子物語)をはじめとする多様な文学・文化が『慧眼』に盛り込まれていることに関する論考である。
2. 先住民の多くは、日本とも関った第二次大戦以外にも、主流社会の認知を得ようと、あるいは選択の余地のない状況で、合衆国の諸戦争に参加してきた。チョクトー族も例外ではない。例えば、第一次大戦ではチョクトー族の兵士が部族語を暗号として使って活躍し、第二次大戦におけるナヴァホ族兵士による暗号の先駆けとなった。
3. チョクトー族の大多数は1830年代の先住民強制移住によってオクラホマのインディアン準州に入れられた。ただ、ごく一部の者はこれを逃れて、白人には魅力のない奥の湿地に残った。
4. 『骨のゲーム』という『慧眼』の続編は、復讐の連鎖を絶つという『慧眼』の主題を継承している。『骨のゲーム』では『慧眼』の主人公コール・マッカーテンの後日談が描かれている。中年になったコールはカリフォルニア大学で教えている。彼は先住民文学を講じているものの、ことばの力を信じることもできず、離婚によって残した娘を恋しがり、アルコール中毒になっている。連続殺人事件が起こる。犯人は1812年にカリフォルニアにきた宣教師を殺害した先住民ベナンシオの怨霊に憑かれている。侵略者である白人に奪われた同胞の怨霊がこの地に住み着いており、それを代表するベナンシオの怨霊はいわば成仏することがない。かくして怨霊が憑依し、犯人はチョクトー族にとっての「邪悪なギャングラー」と化す。その犯人がコールの愛娘を付け狙う。無力であったコールが、あわやというところで娘を救えたのは、先住民ならではの儀式を通じて得られた力による。父ホーイヤルサー、オナティマも登場して活躍する。
5. さまざまな登場人物が、『白鯨』以外の文学作品についても述べるが、いずれも軽い言及にとどまる。作家名だけ挙げると、Robert Frost, Jonathan Edwards, Tennyson, Mark Twain, Thomas Pynchon, William Faulkner。また、オーエンズは小説『ナイト・ランド』でも文学作品へ言及している。特に主人公ウィルにはフェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) の『モヒカン族最後の者』(*The Last of the Mohicans*) が母の膨大な蔵書中、唯一の禁書とされていた点は(24)、オーエンズの白人作家の手になる先住民表象への関心の有様を知る手掛かりとなる。
6. オーエンズの『混血のメッセージ』(*Mixedblood Messages*) に似て『汽車の音が聞こえる』も、自伝エッセイ、写真、創作(短編小説)、文学批評の混交である。ただし先住民作品ではこうしたジャンル混交は稀ではない——レズリー・マーモン・シルコー (Leslie Marmon Silko) の『ストーリーテ

ラー』(Storyteller)が高名である。『汽車の音が聞こえる』にも、スナップ写真も豊富に付いている。翌夏のオーエンズの自殺を考え併せるにつけ、彼が『汽車の音が聞こえる』で人生の総まとめをしているようにも思いなされ、感に堪えない。その副題の“Reflections, Inventions, Refractions”というのは、Reflections が幼少期に遡っての回想随筆、Inventions が短編小説、そして Refractions が批評となっており、3部構成の各部に相当する。Refractions には「屈折（作用）、屈折矯正」という意味があり、オーエンズ批評の輻輳ぶりのみならず、社会を変えていきたいという気概を表すようにも読める。なお、本書の『白鯨』論も、焦点こそ、『慧眼』で扱った「エピソード」のイシューメールから一ページ前の捕鯨船沈没場面に遡って、生粋の先住民銆士タシュテゴに焦点を当てているものの、先住民に白人作家が死の主題を体現させているという『慧眼』での『白鯨』論と類縁する。

7. 『ハックルベリー・フィンの冒険』(The Adventures of Huckleberry Finn) については『慧眼』113頁で言及あり。
8. いずれもモリソンの *Playing in the Dark* の訳には『白さと想像力』を使わせて頂いた。ただし本稿中の頁数は、モリソンの批評書のものである。
9. いずれもオーエンズの *The Grapes of Wrath* の訳には『アメリカのエデンの果て』を使わせて頂いた。ただし本稿中の頁数は、オーエンズの批評書のものである。
10. オーエンズはフォークナーの『行け、モーゼ』(Go Down, Moses) 所収の「熊」(“The Bear”)を中心に述べる。ライオンという猛犬が大熊オールド・ベンとの死闘で受けた傷がもとで死ぬときに、gallery に体を横たえられる。このことを含め、オーエンズには『慧眼』でチョクトー族の「骨捨い」の文化を用いたように、チョクトー族の知識を駆使した「熊」批評も披露できたはずであった。だが、オーエンズはフォークナーには大して触手を動かされなかったようで、いずれも散発的かつ短い言及に留めている。オーエンズが、スタインバックがドーズ法を知らなかったであろうことには寛容であった以上、フォークナーの先住民部族にたいする知識不足が主因だとは考えられない。なお、『混血のメッセージ』でオーエンズは、先住民というものがアメリカ文学においては死すべき人種としてしか表象されていないと述べる点についても、スタインバックがフォークナーと正反対というわけでもなく、先述のように『怒りのぶどう』の挿話における無防備に撃ち殺された先住民に、滅び行く人種の表象の最たるものを見ることはできるはずである。オーエンズはそして、「悲劇的な混血か、部族にとっては文化的に無力な自己破滅型の悲哀」を体現する例として挙げたりもした。これはオナティマによる「熊」論と連動する。オーエンズが、白人作家が先住民を滅び行く人種としか表象しないことに神経を尖らせる証左となる。「熊」についてはではないが、『慧眼』でオナティマは、フォークナーに不吉な名 Chief Doom (「消える運命にある族長」)をつけられた族長が先住民ではなく悪魔として描かれていると主張する。白人作家フォークナーが先住民と死とを関連づけ、悪魔じみた族長に死を体現させたという。しかも、滅び行く人種としての先住民表象は白人文学の典型的なやり口なのだという (216)。これは古くはルイーザ・バーネットやディッピー・ブライアン、新しくはジェラルド・ヴィゼナーらによる指摘とも重なる (Barnett, Dippie, Vizenor)。

引用文献

- Barnett, Louise K. *The Ignoble Savage: American Literary Racism, 1790-1890* (Westport, CT: Greenwood Press, 1975)
- Bergland, Renee L. *The National Uncanny: Indian Ghosts and American Subjects*. (Hanover, NH: University Press of New England, 2000)
- Dippie, Brian W. *The Vanishing American: White Attitudes and U.S. Indian Policy* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 1982)
- Kelley, Wyn. "The Style of Lima: Colonialism, Urban Form, and 'The Town-Ho's Story'" *Melville "Among the Nations": Proceedings of an International Conference; Volos, Greece, July 2-6, 1997* (Kent: Kent State University Press, 2001) 61-70.
- LaLonde, Chris. *Grave Concerns, Trickster Turns: The Novels of Louis Owens* (Norman: University of Oklahoma Press, 2002)
- Martin, Glen. "Best friend's death leaves unanswered questions." *The San Francisco Chronicle*. 3, 11. in *Newsletter*. The John Steinbeck Society of Japan. No.34 (December 15, 2002)
- Melville, Herman. *Moby-Dick*. Vol.6 of *The Writings of Herman Melville* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1982)
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (Cambridge: Harvard University Press, 1992)
- , "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature." *Michigan Quarterly Review* 28 (1989): 1-34.
- Oshima, Yukiko. "The Red Flag of the Pequod/Pequot: Native American Presence in *Moby-Dick*." *Melville "Among the Nations"* 254-66.
- Owens, Louis. *The Grapes of Wrath: Trouble in the Promised Land* (Boston: Twayne, 1989)
- , *John Steinbeck's Re-Vision of America* (Athens: The University of Georgia Press, 1985)
- , *Mixedblood Messages: Literature, Film, Family, Place* (Norman: University of Oklahoma Press, 1998)
- , *The Sharpest Sight* (Norman: University of Oklahoma Press, 1991)
- , "As If an Indian Were Really an Indian." Gretchen M. Bataille (ed.) *Native American Representations: First Encounters, Distorted Images, and Literary Appropriations*. (Lincoln: University of Nebraska Press, 2001)
- , *I Hear the Train: Reflections, Invention, Refraction* (Norman: University of Oklahoma Press, 2001)
- Post-Lauria, Sheila. *Correspondent Colorings: Melville in the Marketplace* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996)
- Rigal-Cellard, Bernadette. "Western Literary Models and Their Native American Revisiting: The Hybrid Aesthetics of Owens's *The Sharpest Sight*." Gretchen. M. Bataille (ed.) *Native American Representations*

Taylor-Guthrie, Danille (ed.) *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: University Press of Mississippi, 1992)

Vizenor, Gerald. *Manifest Manners: Postindian Warriors of Survivance* (Hanover: Wesleyan University Press, 1994)

——. *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1998)

大島由起子「異人種の契りへの見果てぬ夢——『ホープ・レズリー』から『白鯨』へ」『英語青年』（研究社）2002年1月号、10-13頁。

オーエンズ、ルイス 『ジョン・スタインベック「怒りのぶどう」を読む——アメリカのエデンの果て』中山喜代市・中山喜満（訳）（関西大学出版、1993年）

加藤恒彦『アメリカ黒人女性作家論——アリス・ウォーカー、トニ・モリスン、グロリア・ネイラー』（お茶ノ水書房、1991年）

千石英世「解説——暗示でしか語ることのできぬもの」ハーマン・メルヴィル『白鯨』（上）千石英世（訳）（講談社文芸文庫、2000年）635-650頁。

中山喜代市「Louis Owensさんの思い出」*Newsletter*. The John Steinbeck Society of Japan. No. 34 (December 15, 2002) 2.

橋口保夫「Louis Owens 教授の急逝を悼む」*Newsletter*. The John Steinbeck Society of Japan. No. 34 (December 15, 2002) 2.

牧野有通『世界を覆う白い幻影——メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』（南雲堂、1996年）

モリスン、トニ『白さと想像力——アメリカ文学の黒人像』（朝日選書、1994年）

吉田迪子『トニ＝モリスン』（清水書院、1999年）